

クリ「杉光」若木の着穂特性と連年安定生産のためのせん定法

クリ「杉光」の若木は、30 cm以上の結果母枝で着穂数が多く、継続的に必要な結果母枝数が確保できる。1年枝を主体とするせん定法を行うと樹体生育が良く、充実した結果母枝を安定して確保できる。

農業研究センター 球磨農業研究所 (担当者：春崎聖一)

研究のねらい

クリ「杉光」は、平成13年より熊本県の推奨品種となり、「国見」の代替え品種として導入が進められている。本品種は、豊産性で果実品質が優れるが、着穂した新梢の伸長が悪く、着穂過多になった場合に翌年の結果母枝の確保が困難になりやすい傾向がある。そこで、着穂特性を把握して、連年安定生産のためのせん定法を開発する。

研究の成果

1. 着穂特性については、結果母枝の長さが30 cm以上で着穂数が多く、連年充実した結果母枝数を確保できる。また100 cm以上の結果母枝では、先端を3分の1切り返すことにより、着穂が減少せずに翌年の結果母枝が確保しやすい(表1)。
2. せん定法については、1年枝主体のせん定法が樹体生育が良く、充実した結果母枝が多く発生する(図2、図3)。
3. せん定法の違いによる健全果率、1果重、果実比重への影響は少ない(表2)。

普及上の留意点

1. 結果母枝が不足する場合には、2年枝以上の枝を使用する。
2. 余分な枝は、短く切り返して予備枝として利用すると、翌年の結果母枝が増加する。

表1 結果母枝の長さ別の着穂数と翌年の結果母枝の生育

結果母枝長 (cm)	着穂数(個)			翌年の結果母枝の生育					
				発生数(本/母枝)		結果母枝長(cm)			
	H15	H16	H17	H16	H17	H15	H16	H17	
100cm以上	3.8	4.0	2.2	2.5	5.8	39.3	77.8	44.9	
100cm以上(切返有)	—	6.8	2.3	3.5	7.3	—	128.1	41.5	
50cm以上100cm未満	3.4	5.1	1.7	2.7	3.7	55.0	86.0	41.0	
30cm以上50cm未満	3.6	4.3	1.6	2.3	2.6	59.4	83.3	43.9	
30cm未満	3.6	3.0	0.2	2.0	0.5	56.3	65.1	27.6	

注) 100cm以上(切返有) = 先端3分の1を切り返した結果母枝 (3月上旬)

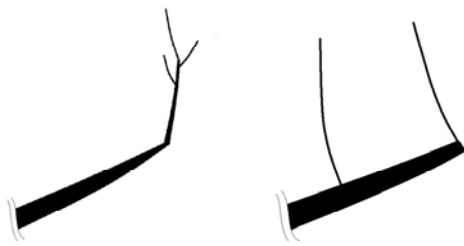


図1 試験区ごとのせん定法の違い

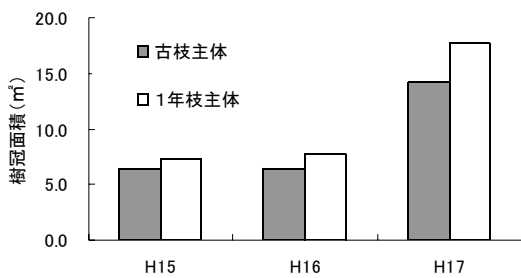


図2 せん定法の違いによる樹冠面積の推移

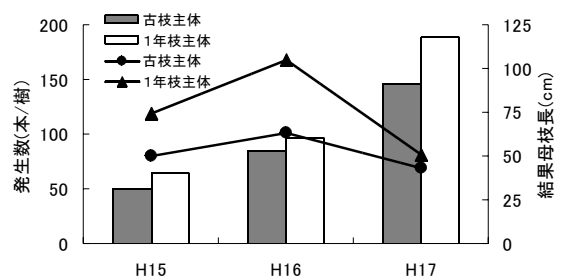


図3 せん定法の違いによる翌年の結果母枝の生育

注) 縦棒=発生数 折線=結果母枝長

表2 せん定法と着穂数及び果実品質との関係 (3カ年平均)

試験区	着穂数 (個/樹)	健全果率 (個数%)	1果平均重 (g)	果実比重
古枝主体	336	64.2	26.5	1.070
1年枝主体	341	60.6	25.2	1.061

注) 着穂数については、3カ年の累積数